

2015年 IACS 国際学会参加旅行記

秦 勤

日本文学専門 博士後期課程2年

8月5日-7日にインドネシアのスラバヤ市で行われた IACS (Inter-Asia Cultural Studies Society) 国際学会に参加してきた。「スラバヤ」という名前はインドネシア語で鯨を意味するスラと鰐を意味するバヤがこの地で最強の動物を争ったという神話に由来し、市章に表されている。天然の良港タンジュン・ペラック港を中心に、オランダ植民地時代から貿易の中心として栄えた。現在はインドネシア最大の港湾で、最大の軍港である。

今回は、IACS 学会に参加する理由はいくつかある。まずは、2004年から始まった IACS 学会はアジアに関する研究のトップと言われる権威のある学会の1つなので、たくさんの研究者が来ていた。さらには、今回の学会には、自分の研究（ジェンダー及びクイア研究）と近い発表が多かったということ。

1日目から3日目はほとんど学会漬けだった。会議の場所はスラバヤ市におけるアイルランガ大学。3日目は自分の発表が終わった後、スラバヤ市街をちょっと観光してきた。バリ島やジャカルタなどの大都市と比べると、スラバヤは特に観光地ではない。あまり見る物も無く、車とバイクが多く、街歩きは疲れた。しかし、街行く人も優しく、料理も美味しかった。4日目は飛行機で名古屋に帰った。

簡単に費用をまとめると

- ・飛行機 名古屋とスラバヤ往復 11万円
- ・ホテル 3泊 1.3万円
- ・ピザ 25usd (約3000円)
- ・タクシー 5000円
- ・食事 4000円

台湾旅行記

岡 英里奈

日本文学専門 博士後期課程4年

私は2015年11月13日から16日にかけて、台湾・新北市に滞在した。輔仁大学で開催される国際シンポジウム「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」・「次世代フォーラム」に参加するためである。

到着翌日の14日は招待講演も含めた研究者による「翻訳」をテーマとする多くの報告を拝聴した。帝国日本による植民地化や戦争の歴史は、たくさんの人々の移動をもたらし、時に権力関係を孕んだ、多言語的な状況を生み出した。そしてそこでは、日本語からハングルに、中国語から日本語にといった文字通りの翻訳作業とともに、より広い意味での、文化の接触や受容、または衝突といった現象があらゆる場面において起こっていた。報告のなかでは、そうした「翻訳」をめぐる数々の現象の跡を文学テキストの中から掘り起こし、言葉が移動すること、文化が移動すること、そして人々が移動することの意味を、多様なアプローチによって追求する刺激的な論が数多くあった。

シンポジウム2日目の15日は、大学院生を中心とした「次世代フォーラム」が開催され、私も「旅する作家、旅する言葉——脱「文明批評」的藤村論のために」というタイトルで報告を行った。その内容は、作家・島崎藤村が1936年に南米を訪問した際に、現地の日本人移民の子どもたちに贈られた「大和言葉の碑文」について考察したものである。作家が旅し、それについて記録したテキストに向き合うとき、多くの場合私たちはその作家個人の文学性に注目して読解を進めていく。だが、時として作家の旅にはその背後に強力な支援者がおり、作家が何を見て何を書くのかに大きな影響を与えることがある。藤村の南米訪問の場合、その支援者とは日本政府であり、そのため彼の旅とは、あらゆる政治的立場が拮抗する空間において遂行されたものであった。だから彼が現地で言葉を発したり届けたりする場合にも、その言葉はそうした立場の数だけ多様な意味をもつ。報告では、その様子を柿

本人麻呂・在原業平・源実朝・西行による和歌4首が集められた「大和言葉の碑文」によって考察した。報告後の質疑応答では様々な立場からのご意見やご質問を頂き、この報告をもとに博士論文を執筆していく上でたくさんのヒントを得ることができた。

15日のシンポジウム終了後は、エクスカーショとして台北の旧市街を散策し、寺院や商店街で台湾の

信仰文化や食文化などに触れる機会をいただいた。また旧市街には日本統治時代の建造物が多く残っており、それが現代の台湾社会においてどのように再利用されているのかを観察することもできた。

最後に、この台湾出張にあたっては、名古屋大学文学部教育研究推進室からの海外研究発表渡航費助成をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

旅行記

藤田 祐史

日本文学専門 博士後期課程1年

2015年11月14日(土)15日(日)の両日に渡って開かれた「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」台湾大会に参加をした。以下、大会初日からの印象に残った点など、簡単に記述しておきたい。

一日目の会場は三つの教室に分かれており、残念ながらすべての発表者の発表を拝聴できたわけではないのだが、会場が台湾であったこともあり(また、大会の総合テーマが「文化翻訳/翻訳文化」だったこともあり)、「言語実験としての旅——佐藤春夫の『台湾もの』における『越境』」、「旅行者徳富蘇峰がまなざした中国、台湾」、「1945年以前の台湾における日本語書籍雑誌の流通」など、台湾・日本に関わる興味深い研究に出会うことができた。

二日目には、私の発表があった。「芭蕉と Basho——リービ英雄『千々にくだけて』論」という題目で、俳句の翻訳は可能か否か、それをリービ英雄の小説を読むことにより応えようとした発表であった。この対象とした小説の作者は、父親の仕事の関係で少年時代をここ台湾(台中)で暮らしていた。私はこの大会の一ヶ月ほど前まで、その事実を知らなかった。だから不思議な縁を感じながら、話をした。それから、13日には、パリでの同時多発テロ事件が起こっていた。私はその事件を、14日の大会が終わり、ホテルに帰ってからはじめて知った。15日、私の扱った小説は、9月11日のアメリカでの同時多発テロ事件を扱ったもので、主人公は、芭蕉の俳句を口にするので、今、目の前に起きていること(世界)に、向き合

おうとしていた。こんなときにこんな小説を使って発表をすることにも不思議さを覚えながら、私は俳句の翻訳について、リービ英雄(とその小説の登場人物)が志向した複数性について、考えを述べた。

三日目は、自由に散策する予定であったので、個人的な関心から、同じ名古屋大の研究仲間である西村峰龍さんと連れ合っ、「基隆」に出かけた。先日までの発表のなかで、このキリュウ、キールンという音に何度か出会い、それが気になっていたのだった。そこには、かつて「日本」から「台湾」を訪れる人がはじめに入る主要な港があった。そして、現在の基隆は明るい港町で、街なかには日本統治時代の建物が今も使われていた。11月中旬であるのに、三十度近くまで気温は上がっていただろうか。ひたすら汗を流しながら、かつて「日本人」が出入りし、あるいは「台湾人」が行き来した街を歩きまわった。

帰国後、輔仁大学の横路啓子先生からメールがあった。台中に住む学生がリービ英雄を研究しており、私の今回の発表の詳細を知りたがっていることから、一度連絡を取ってほしい、とのご紹介であった。その彼に連絡を取ると、彼は英国で日本文学を学び、2016年からは、日本の大学院で現在の研究を進めたいとのことであった。その彼の使う丁寧な日本語のメールの文章を読みながら、この人が、日本語を使って、台湾について、パリについて書く日のことを思った。そして、やはり、不思議な気持ちが抜けないのだった。